コインケース　カード入れ　キーチェーン　3つの機能で超便利！

トラベラーズ・ウォレット

フィールドでも街でもマルチに使える！

BE-PAL

ビーパル 3 MARCH

NATURE & OUTDOOR LIFE MAGAZINE

広報 持出禁止！チェック

アウトドア道具選びはビーパルにおまかせ！

国カリスマショップ・
イヤー・ユーザー大調査

最新

売れた＆買ったモノ」ランキング発表！

ベストヒット100

＆今シーズン
バカ売れ予想アイテム
全部見せます！

春はやっぱり「野遊び」ですよ！

小屋ブームが来てます！
男の秘密基地
アウトドア達人実例集6

ドラえもんが
北海道で
犬ぞりに挑戦！

⬇北海道。3歳のナイラは自分で自転車を漕ぎ、疲れると母親の後ろに接続して引っ張ってもらう。
©http://www.ylia.ch/

野田知佑の

のんびり行こうぜ
こぎおろしエッセイ

スイスからやって来た3人家族。6年間、世界35か国を自転車で旅してきた一家が、日和佐で感じたこととは——？

スイスの旅一家

年末、モンベルの辰野から、スイスの三人家族がぼくのところに送りこまれた。

三十六歳と三十四歳の夫婦、三歳の娘である。大きな荷物バッグを両脇に取りつけた夫妻の自転車の後ろには、子供用自転車とカートを曳いている。この日は雨で、完全防水されたカートから、小さな女の子が出てきた。犬たちが尻尾を振って一家を歓迎し、勢いよく幼女に飛びついた。

夫妻はスイス西部のローザンヌに近い田舎町の出身で、七年前、国内の山中で開催していた音楽フェスティバルで出会った。その頃、夫のザビエルが自転車旅行を始めたばかりで、彼の話に興味を持ったセリーヌに、「君もくる？」と訊いたら、「Oui（ウイ）！」と二つ返事で即答したのが、二人の旅の始まりだった。夜はテント泊だ。

最新刊
好評発売中！

『ユーコン川を筏で下る』
野田知佑・著
本体1,200円＋税　小学館刊

PROFILE 野田 知佑
（のだ・ともすけ）
カヌーイスト、ノンフィクション作家。1938年、熊本県出身。幼少時代に空襲を避けるため熊本県菊水町に疎開し、菊池川で魚捕りに明け暮れる。八幡高校時代は水泳と映画に夢中になり、大学ではボート部に所属。卒業後、英字新聞の販売拡張員をしながら日本各地を放浪。1965年、横浜港発の船に乗り、シベリア鉄道経由でヨーロッパを訪問。スウェーデンでカヌーに出会う。その後、高校の英語教師、海外旅行雑誌編集者を経て、1982年に『日本の川を旅する』で日本ノンフィクション賞新人賞を受賞し作家デビュー。著書に『カヌー犬・ガク』『北極海へ』『新・放浪記』『ハーモニカとカヌー』『ダムはいらない！』『川の学校』ほか。

←㊨パミール高原の4000m級の高地を行く。㊧オーストラリアにて。自分のカートを押して手伝うナイラ。

旅先で結婚し、途中で子供ができ、二〇一三年にマレーシアのペナン島で出産した。そのまま旅を続け、二〇一五年末まで、六年間で主にユーラシア大陸、オーストラリア大陸の三五か国、五万キロを走った。その内、一万五〇〇〇キロは娘が一緒だった。

これまで訪れた国ではシリアが特に印象深い。人々がとても人懐こくて優しかった。自分たちの所にやってきては、「うちに泊まっていけ。ご飯も一緒に食べよう」ともてなしてくれた。それで初めの二週間はテントを張ることがなかった。食事も美味しかった。

タジキスタンでは、パミール高原の七〇〇〇メートル級の山々に囲まれた、四〇〇〇メートル以上の高地を二週間走った。厳しいが美しい自然だった。モンゴルを通った時は冬で、マイナス三〇度の厳寒のなか、広漠とした大地を横切っていく感覚がよかった。

オーストラリアでは東西に一二〇〇キロ広がる砂漠、ナラボー平原を十九日で通過した。砂漠にはロードハウスと呼ばれる給油や飲食ができる簡単な宿屋が点在している。次の宿まで二〇〇キロ離れている区間がある。そこを三日で通過する時、出発前に六〇リットルの水を荷物に積んだ。鉄道が発達しなかったオーストラリアでは、ロード・トレインと呼ばれる大型トラックを十数台連結した長さ一〇〇メートルくらいのものがある。それとすれ違う時、しばらく砂埃で何も見えない。これが怖かった。

砂漠の気温変化は激しく、日中は日蔭でも四十三度、夜になると一〇度に下がる。生まれてずっと放浪しているナイラは、ほとんど病気をしたことがないほど丈夫だ。未舗装の穴だらけの悪路を進んだ時も、激しい揺れで酔ったりしていないかとカートの中を覗いた親の心配をよそに、ぐうぐうと寝入っていた。

日焼けと疲労防止に長袖を着こんで顔をフードで覆い、大アリやイバラを避けて、木陰を求めてキャンプ地を探す。昼食はとても攻撃的なハエから逃げるために、自転車の間に張った蚊帳の中で済ます。

荒涼とした土地に日が照りつけ、筋肉はこわばり、極限状態になる。脱皮したヘビの抜け殻を見て、旧い様式を脱して、自由になっている自分たちの姿を重ねた。しばらくすると不満は消え、精神的に安定する。

旅こそがライフスタイル

ニュージーランドで仏語で紀行文を書き上げると、二〇一六年の初頭に故郷に戻った。娘のナイラは二歳半になっていて、初めて祖父母や親戚に会った。

しかし文明社会に戻ると、時間やスケジュールに追われて、何のために生きているのか分からなくなることがある。ゆっくり考えるための静かな時間がない。

冬をスイスで過ごし、春になってまた旅に出た。

「いつ旅を終えるつもりなんだ？」

「自分でも分からない。旅は今ではぼくたちのライフスタイルなんだ」

「旅の途中で一番恋しいのは何だ？スイスの故郷？　スイスの食べ物？」

セリーヌが答えた。

「特にないわ」

「三人ともタフだね」

ザビエルがいった。

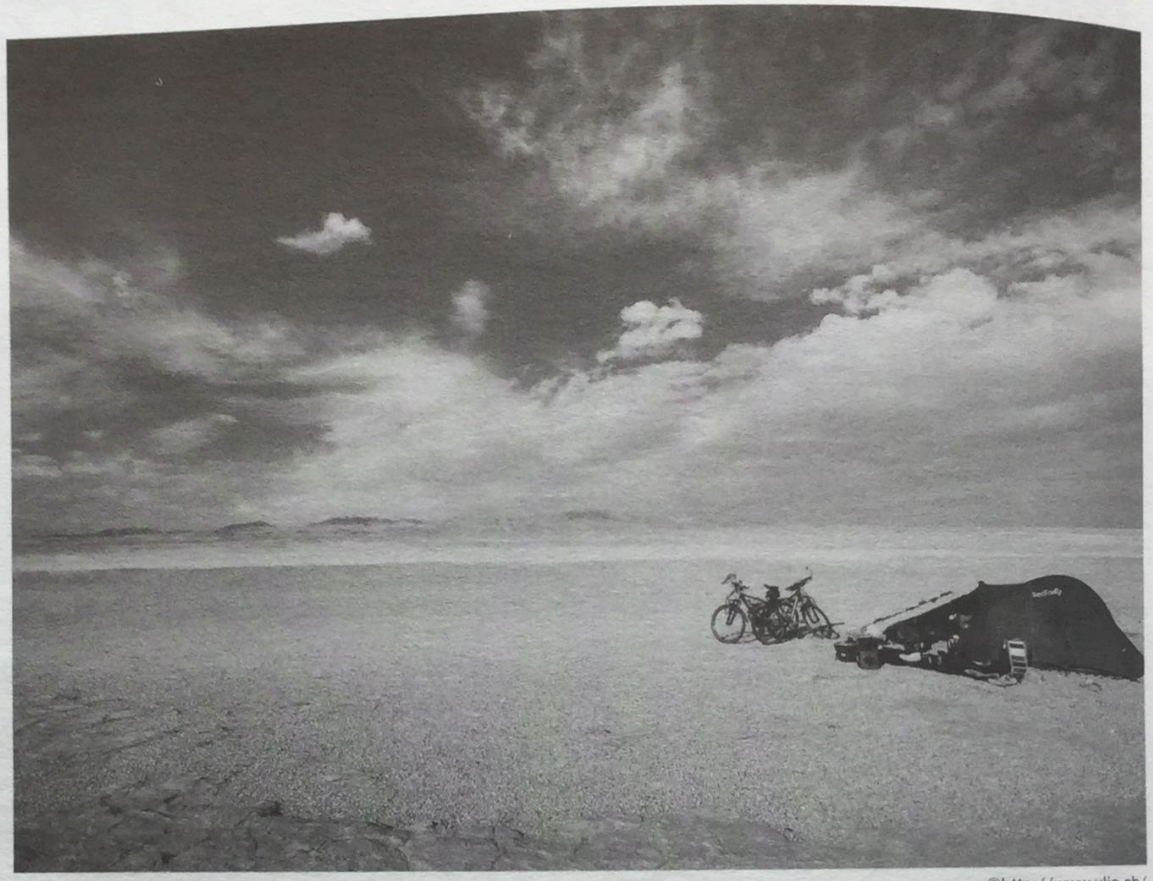
「口にすると恥ずかしいけど、ぼくらは今、とても幸せな時間を過ごしているんだ。家族三人で人生で一番大切な時間を分かち合っている。これ以上のものはないよ。できるなら、一生この旅をしたい」

「やれるじゃないか。ぼくの友達にも一生ふらふらと旅行して、それを書いたり講演したりして暮らしている奴が何人かいるよ。人が心底好きなものを見つけたら、それを続けてやると、食っていけるよ。君の望みは何だ？」

「今の旅を続けていくこと。スイスに戻れば、食うために仕事に就かなければいけない。妻も働くようになるだろう。そうすると、今のような充実した時間は持てない。でも、旅をすることが辛くなったり、ナイラが放浪生活を望まなくなったら、そこでやめる」

ザビエルは決然とした顔をしていった。彼は建築家をやっていて、デザイナーズハウスなどを作っていた。

日本には四か月前にきた、といった。



⬆中国の砂漠でキャンプ。

©http://www.ylia.ch/

「北海道では妻が体調を崩した時に、ちょうど四つの台風がきて、川が氾濫しました。キャンプ場で困っていたら、偶然会ったKさんがうちにおいでと招いてくれた。町の半分の家が浸水して大変な時だったから、とても助かった。彼の家は父と子の二人暮らしで、ゆっくり療養させて貰った。おかげで妻も快復して、また旅を続けることができたんです」

偶然にも、Kとぼくとは彼が学生時代からのつきあいで、カヌーのアウトフィッターをやっている。父子二人というが、奥さんが札幌で校長をやって単身赴任しており、娘も就職して家を出ている。芯から親切な男で、一家が彼に会ったのは幸運だった。

資金はどうしているのかと尋ねると、装備はスポンサーから貰い、この前スイスに帰った時に、本を出版し、国内各地で講演をして稼いだ。

「でも、基本的にぼくたちの旅はお金がかからない。移動の燃料は要らないし、野宿で、毎食自分たちで作るから」

今後は、愛媛から九州へフェリーで移動し、ビザの関係で一月半ばに下関からフェリーで釜山に渡り、モンゴル、ロシア、アラスカ、カナダを経てヨーロッパに帰る予定だ。

ぼくの家に四泊し、日中は家の周りを散歩し、夜はメモや書き物をしていた。日本食好きでみんな納豆を食べ、アジア生まれの娘は米好きだ。

庭の池にカヌーを浮かべ、ナイラを遊ばせた。父親としばらく一緒に漕いでいたが、次に代わった母親がフネの舳(へさき)に長いロープをつけ、

「自分で漕ぎなさい」

といった。彼女は池の縁を一緒に歩き、「アン、ドゥ、トロワ……」と数えながら、娘に漕ぎ方を教えていた。そこに犬たちがやってきて、フネに飛び乗り、ナイラは初めてのカヌーを犬と一緒に漕いだ。

天気がいいので、ザビエルはキャンプ道具を干し、自転車の手入れをした。

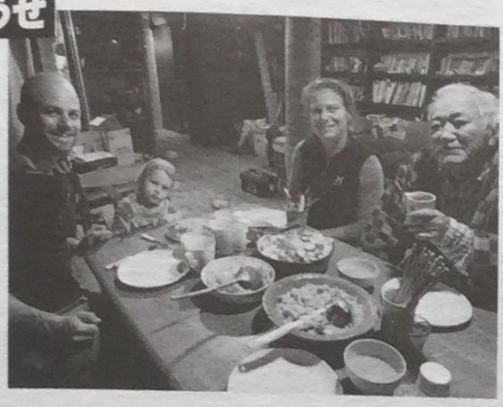
⬅ワニカヤックに乗ったナイラ。怖かった犬にも慣れた。

©http://www.ylia.ch/

➡網で岩肌を撫で、はりついたヌマエビを捕る。

夫妻の自転車は旅を始めて以来、部品を取り換えながら使い続けている。タイヤや錆びたボルト、変形した泥除けなどを替えた。

カヌーを終えた母親と娘は犬たちと裏山に散策に出かけ、二時間ほどして、少ししなびたキイチゴをプラスチック容器にいっぱいに摘んで帰ってきた。ナイラは両手両足で、犬と一緒に走っている。同じ年頃の人間がいないので、真似をする相手がいない。だから、子供は犬の真似をして、「Bow wow」と吠え、両手両足で走った。犬が藪に入るとナイラも藪に入る。舌を出してハアハアとあえぎ、疲れると母親の足元で丸くなった。



➡最後の晩、スイス料理を作ってくれた。

彼女は以前、犬に肘を噛まれたことがあって、犬を怖がっていた。しかし、ぼくの犬と遊ぶことでトラウマがなくなり、犬に抱きついていた。

日和佐川に連れていった。水が冷たく魚の姿はないが、ナイラとセリーヌは裸足になって浅瀬を歩き、ザビエルは石を投げて水切りをして遊んだ。

「ここはきれいな海も山も川もあってとてもいい所ね。またきたいな」

とセリーヌがいった。

ぼくがいった。

「ここは過疎地なんだ。人がどんどん減っている。若者のほとんどは大学進学で都会に出ていく。そこで就職して結婚して、戻ってこない。小中学校も一学年一クラスだ」

「スイスの小学校も一クラスよ。スイスには一〇〇〜二〇〇人の村がたくさんある。しかし、人々は都会には住まず、車で三〇分〜一時間くらいかけて街の会社に通勤している。子供たちは学年に関係なく、小さい子から大きな子まで一緒になって遊んでいるわ」

「日本では、学年の違う子を遊ばせない」

「なぜ?」

「いじめが起きるというんだ。それはおかしいよ。第一、上級生がいないと遊びが面白くないよ。魚捕りも小鳥を捕ることも、野球も相撲も上級生が上手いし教えてくれる。年上の人間がいないと、遊びのレベルが低くてつまらない」

現在、日本では子供たちの間で遊びの伝統が消えている。年齢の違う子供の交流がないのだ。

この前、ぼくの郷里の家の近くのお宮にいった。子供の頃、三角野球をやった広場を歩いた。一つの狛犬(こまいぬ)がファーストベースで、もう一つの狛犬がサードベースだった。

向こうから頭の禿げた爺さんがやってきて、懐かしそうにぼくに声をかけた。小学三年の彼に六年生のぼくが竹馬や鳥かごを作ってやり、山に入って山芋を見つけて掘り、川に連れていって水泳を教えた。大人になると三つ違いは大差ないが、彼はぼくを恩師として扱い、面白かった。

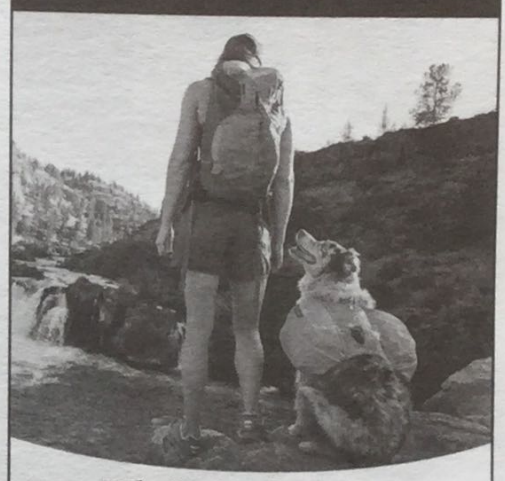
「川の学校」の子供たちに何が面白かったかと訊くと、上級生やスタッフの青年と遊んだことが一番楽しかったという。

五日目の朝、彼らは南に向けて発った。

快晴。Bon Voyage!

※2017年「川の学校」スタッフを募集します。詳細は、HP http://kawanogakko.jp/ または、☎090-8283-4349オバタまで。

RUFFWEAR



愛犬と楽しむ
アウトドア・ライフ
Performance Dog Gear

犬用品アウトドア・ブランド「ラフウェア」。
登山をはじめ、人と犬が一緒に
アウトドアを楽しむための商品を
幅広く取りそろえています。

❶#1874108 アプローチパック 税抜き価格 ¥9,900(+税)
❷#1874604 ビーコン 税抜き価格 ¥2,700(+税)
❸#1874306 グリップトレックス 税抜き価格 ¥9,400(+税)

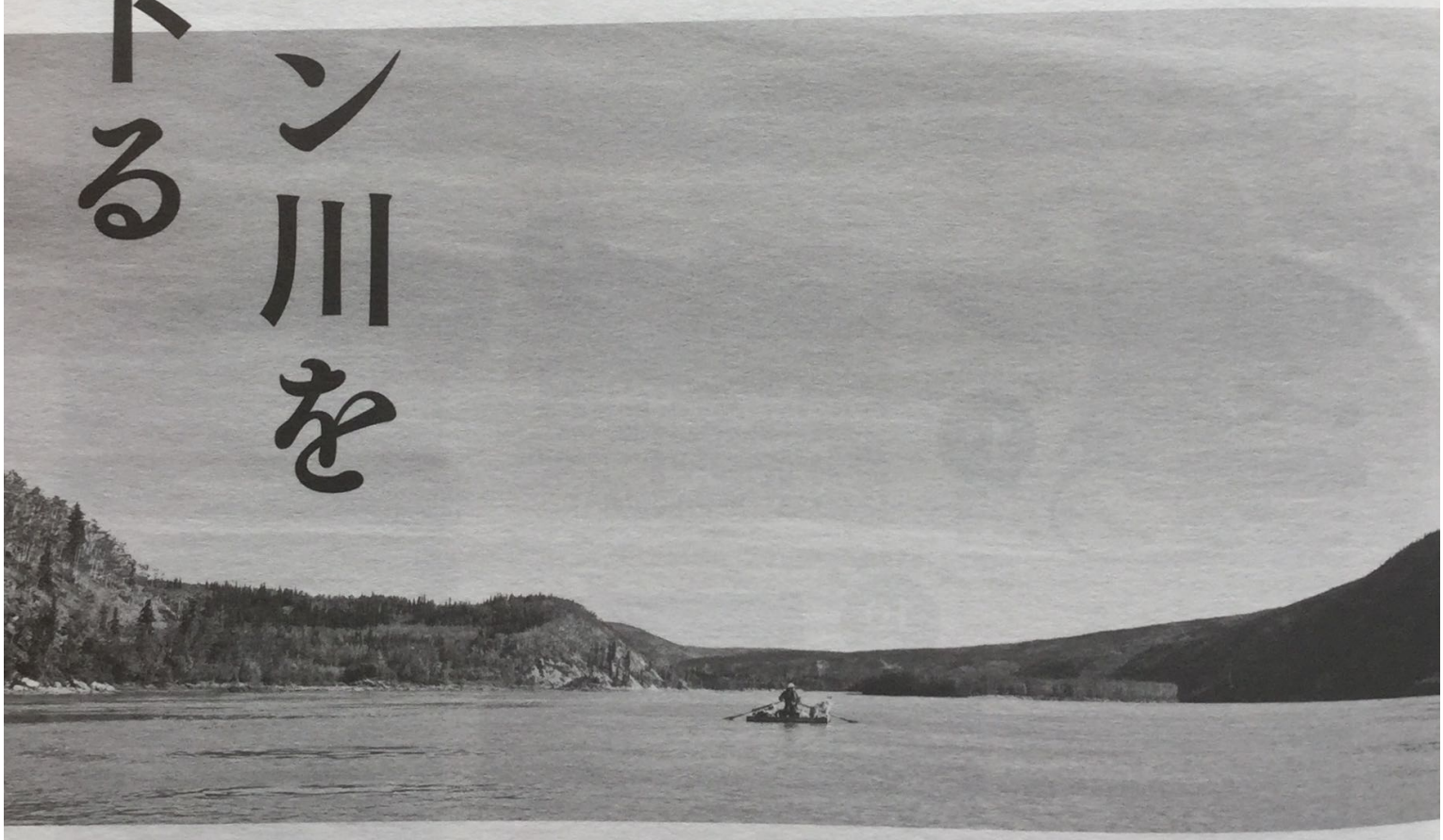
詳しくは、ラフウェア 公式サイトへ▶
www.ruffwear.jp

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス
0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

野田知佑

ユーコン川を筏（いかだ）で下る

1975年冬、『NATIONAL GEOGRAPHIC』誌に、カナダとアラスカを貫く大河・ユーコン川を下るイカダ冒険者たちの記事が載った。当時30代の会社員だった著者は衝撃を受け、やがて毎夏のようにユーコンを訪れるようになる。ただし、イカダではなくカヌーが旅の道具だった。幾星霜を経て、75歳になった著者は「これが最後になるだろう」と決意し、仲間とともに自作したイカダで24日間、700kmの旅に出る。2000年前から変わらない風景、120年前のゴールドラッシュの遺物、焚き火に去来する若き日々の記憶……。悠久の大河を旅することは、「歴史感覚のなかの散歩」であった。日本を代表する紀行作家、畢生の大作！



全国書店で好評発売中！

本体1,200円＋税

四六判・208頁
ISBN978-4-09-366548-3

75歳、イカダの大冒険！

ぼくのカヌー人生の中で、ユーコン川は、
すべてを放りだして娑婆と縁を切り、
漂流し、自由を謳歌する最大最良の場所である

著者プロフィール／野田知佑（のだ・ともすけ）1938年生まれ。熊本県出身。カヌーイスト／紀行作家。1980年代後半に「チキンラーメン」のCMに登場し一世を風靡した。『日本の川を旅する』ほか著書多数。

小学館愛読者サービスセンター ☎03(5281)3555 http://www.shogakukan.co.jp

小学館